

プログラミング 楽しく

鯖江・神明小でモデル授業



教員や高専生の指導を受けながら、眼鏡ふきロボットを作る子どもたち＝7日、鯖江市神明小

20年度必修化向け 高専生も協力

2020年度から小学校で必修化されるプログラミング教育に向け、県内のIT業者でつくる「PCN(プログラミング・クラブ・ネットワーク)」が考案したカリキュラムの実践講座が7日、鯖江市神明小で開かれた。学校教員とサポート役の福井高専生らが協力して授業を行い、子どもたちのプログラミングへの好奇心を育んだ。

(桑野真吾)

PCNの取り組みは総務省の「若年層に対するプログラミング教育の普及推進」事業の採択を受け実施。必修化へ向けモデルとなる授業の進め方を提案する目的で4月から、授業を担う教員や福井高専生向けの研修を行うなど準備を進めてき

た。同小5、6年生の希望者約30人が3クラスに分かれて取り組んだ授業は、手のひらサイズの子ども向けコンピュータ「イチゴジャム」を活用。画面に流れてくる障害物をよける川下りゲームのプログラミングや、光センサーを利用した眼鏡ふきロボットの制作など5時間の構成で行った。表に「LEDを点灯させる」「音を鳴らす」などのコマンド、裏にはその動作を命令するためのプログラミング言語が書かれたカードを使ったり、タイピングに慣れていない児童のために黒板に拡大したキーボードの写真を貼って文字の位置を説明したりと、分かりやすく教えるための工夫が随所に光った。子どもたちには高専生が1人ずつ付き添ったのはうれしかった。作業に行き詰まったときには優しく指導。一緒にモニターを見つめながら解決に当たっていた。授業を担当した同小の渡辺直文教諭は「プログラミングの技術が大事な時代なので、子どもたちに親しみやすいゲームなどを通して、その魅力を肌で感じてもらうのはよかったと思う」と手応えをつかんでいた。PCNの松田優一代表は「高専生のサポートによって子どもたちみんな遅れることなく予定通りの時間で授業ができ、すごくよかった。必修化へ向け他校の参考になれば」と話していた。